

専門図書館の現状を探る : 大学生による現地調査をてがかりに

村上, 郷子

(出版者 / Publisher)

法政大学資格課程

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学資格課程年報

(巻 / Volume)

11

(開始ページ / Start Page)

5

(終了ページ / End Page)

15

(発行年 / Year)

2022-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026174>

専門図書館の現状を探る

——大学生による現地調査をてがかりに——

法政大学キャリアデザイン学部兼任講師 村上郷子

1. はじめに

(1) 研究の目的

本稿の目的は、東京都に所在する大学に通う図書館司書資格課程の履修生による専門図書館での現地調査の結果を定質的・定量的に分析し、専門図書館の管理運営、図書館資料および図書館サービスの現状について考察することである。現地調査の評価項目は、2012年12月に告示された「図書館の設置及び運営上の望ましい基準^{註1}」を参考にした。

(2) 専門図書館とは何か

日本図書館協会の『図書館用語集』によれば、専門図書館とは「特定の専門主題領域の資料を収集・整理・保管して、その専門領域の利用者の利用に供する図書館^{註2}」である。主な機関として、企業をはじめ、政府機関、民間団体、大学その他の研究機関などが例示されている。ユネスコの定義では、「(1) あるひとつの学問分野または特定の専門領域を主たるサービス対象とする図書館、(2) ある特定のカテゴリーに属する利用者へのサービスを専門とする図書館、(3) ある特定の種類 (form) の資料を専門に取り扱う図書館^{註3}」が専門図書館である。

専門図書館には多種多様な機関種が存在している。しかし、専門図書館そのものを対象にした図書館関係の法令が存在していないことから、あらゆる専門図書館を網羅した明確な定義は定着していないという識者もいる^{註4}。とはいえ、専門図書館の一般的な特徴として、特定の専門領域を持ち、その専門領域の利用者にサービスを提供し、特定の資料を取り扱っている機関であるということがわかる。これらの特徴に加えて、より能動的な定義を提示したのは専門図書館協議会である。専門図書館協議会（以下「専図協」）では、「専門的な情報資料を収集・蓄積し、分析・加工することにより、付加価値のある情報を提供する、またはそのような状況を作り出せる図書館^{註5}」を専門図書館と定義した。つまり、専門図書館における情報提供には何らかの付加価値を与えることが求められているということを示唆したのである。

専門図書館の機関種は多岐にわたる。専図協の「専門情報機関総覧」2018年版（2022年2月2日時点の最新版）では、(1) 特定分野の資料を重点的に収集・整理・保管し、一定の人々の利用に供する図書館や機関、(2) 事業組織（官公庁、団体、公文書館、民間企業、大学、学協会、美術館、博物館、調査研究機関等）の中の資料・情報部門（図書館、資料室、情報センター等）のいずれかに該当する機関が専門図書館として取り上げられている。前述の通り、地方議会図書室（地方自治法第100条の18）や独立行政法人の設置する図書館などの一部例外を除き、専門図書館には図書館活動の拠り所となる法令は現在のところ存在しない。しかし、「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」（以下「望ましい基準」）では、公立図書館だけではなく専門図書館の多くが該当する私立図書館も対象となった。

(3) 私立図書館とは何か

狭義に捉えれば、図書館法（第2条第2項）で、私立図書館とは、公共図書館のうち「日本赤十字社又は一般社団法人若しくは一般財団法人の設置する図書館を私立図書館という」と規定されている。広義には、「資料提供サービスを行う図書館のうち、設置者が国や地方公共団体以外の民間の機関や個人であるものを私立図書館と呼ぶ場合がある^{註6}」といわれる。これらの解釈によると、民間企業や公益・一般の社団・財団法人、社会福祉法人やNPO法人等の団体の多くは私立図書館であり、「私立図書館のほとんどが専門図書館^{註7}」でもあることから、「望ましい基準」に私立図書館が含まれた意義は大きい。

専門図書館、とりわけ私立図書館に該当する専門図書館の多くは、その設置・運営に関わる費用は自前で賄っている。そのため、公立図書館や学校図書館のように教育上の必要性から図書館の設置・運営に関わる費用を設置母体が負担している機関種の管理運営の方針をそのまま専門図書館に当てはめることは適当ではない。「望ましい基準」の適用についても、文部科学省は、図書館法第26条により、私立図書館における「ノーサポート・ノーコントロールの原則を変更するものではない^{註8}」と留意事項に明記している。

(4) 「望ましい基準」と私立図書館

では、図書館法や「望ましい基準」では私立図書館に対し、何を定めているのだろうか。葉袋 (2013)^{註9}の整理によれば、(1)「私立図書館に対する国・地方公共団体の関与は、現在も厳しく制限されており、私立図書館の求めなしに指導・助言を行うことはできない」とされる。また、(2)「新基準の私立図書館に関する規定の末尾は「努めるものとする」「することが望ましい」となっているため、新基準には私立図書館に対する強制力がない」のである。具体的には、「望ましい基準」における私立図書館の項目には、「一 管理運営 1 運営の状況に関する点検及び評価等、2 広報活動及び情報公開、3 開館日時、4 施設・設備」「二 図書館資料」「三 図書館サービス」「四 職員」があるが、いずれの項目の末尾も例えば、多様な利用者に配慮した〇〇に「努めるものとする」もしくは「することが望ましい」となっており、「努めなければならない」とする公立図書館での記述とは一線を画している。このような「望ましい基準」の意義として、(3)「専図協関係者は、新基準に対して、私立図書館運営の「目安」の確立、社会的認知、ネットワーク、サービスの発展等の点で、私立図書館の発展につながると評価している」と結論づけている。

このように専門図書館を含む私立図書館も対象にした図書館法や「望ましい基準」の適用の制限に配慮しつつ、本稿では、東京都内の大学に通う図書館司書資格課程履修者による専門図書館の現地調査の結果を分析し、専門図書館の管理運営、図書館資料および図書館サービスの現状について考察する。

2. 調査方法と評価者・調査機関の属性

(1) 調査方法と評価者の属性

本専門図書館の現地調査は、東京都に所在する大学の司書資格課程で開講されている「図書館情報資源特論」(2017～2021年度)の授業履修課題のひとつである。履修生は、自身の興味関心や通学区間における訪問可能な専門図書館リスト(教員作成・全46館中実際に学生が訪問した図書館はのべ28館)の中から1館選択し、原則2名で個別に現地調査やインタビュー調査を行い、グループウェア(NetCommons)^{註10}のアンケート機能を使った調査票に入力した。年度によって履修生の数や履修生が担当した専門図書館が異なるため、リストにあるすべての専門図書館を均等に調査したわけではない。アンケートの実施期間は、2017年～2021年の10月中旬から12月上旬の間であり、有効回収の総数は110であった(表1参照)。

アンケート回答者の内訳は、2017年33名、2018年19名、2019年20名、2020年17名、2021年21名であり、女性が90名(81.8%)、男性が20名(18.2%)の合計110名であった。学年別では、2年生が79名(71.8%)、3年生が24名(21.8%)、4年生以上(含む大学院等)が7名(6.4%)であった。回答者の所属は、文学部が86名(78.2%)であり、キャリアデザイン学部8名(7.3%)、人間環境学部7名(6.4%)、法学部4名(3.6%)、その他5名(4.5%)であった。このことから、回答者の主な属性は、大学2年生以上の文学部出身の女性が8割前後を占めていたことになる。

表1 評価者の属性(学年・性別・所属)

学年	2017	2018	2019	2020	2021	total (%)
2年生	27	10	13	14	15	79 (71.8%)
3年生	6	8	5	2	3	24 (21.8%)
4年生以上		1	2	1	3	7 (6.4%)
性別						
女性	24	14	20	16	16	90 (81.8%)
男性	9	5	0	1	5	20 (18.2%)
所属						
文学部	23	13	19	12	19	86 (78.2%)
CD学部	4	4	0	0	0	8 (7.3%)
法学部	2	0	1	0	1	4 (3.6%)
人間環境学部	3	1	0	2	1	7 (6.4%)
その他	1	1	0	3	0	5 (4.5%)
合計	33	19	20	17	21	110 100%

(2) 調査対象の機関種の概要

調査対象の機関種については、専図協の「専門情報機関総覧」(以下「総覧」)を参考にした。2018年版によれば、専門図書館(n=1645)の機関種は13区分であり、それぞれの機関種別割合は以下の通りである：(1) 大学・大学院(附属研究所含む)(以下大学・大学院)(30%)、(2) 美術館・博物館・資料館(国・公・私立)(以下美・博・資)(18%)、(3) 公益社団・財団+一般社団・財団(11%)、(4) 国(政府)関連機関、独立行政法人(以下国・独法)(9%)、(5) 民間企業(8%)、(6) 公立図書館(国立除く)(8%)、(7) 地方議会・地方自治体(9%)、(8) 国際機関・外国政府機関(以下国際・外国)(1%)、(9) 団体・団体内(社会福祉法人・NPO法人等)(3%)、(10) 公文書館(文書館)(国・公立)(以下公文書館)(2%)、(11) 病院・医療センター(1%)、(12) 専門学校、各種学校(0%)、(13) その他(1%)。専図協の調査では、上位(1)、(2)、(3)の3機関種で約6割を占めていることがわかる。

本調査の訪問機関種(合計28機関・110件)は、以下の6区分にまとめた：(1) 大学・大学院(3機関・18件・16.4%)、(2) 美・博・資(3機関・15件・13.6%)、(3) 公益社団・財団+一般社団・財団(9機関・38件・34.5%)、(4) 国・独法+国際・外国(4機関・11件・10%)、(5) 民間企業(5機関・11件・10%)、(6) 公立図書館+公文書館+地方議会・地方自治体(4機関・17件・15.5%)。(4)については、専図協13の機関種のうち、(4)と(8)を合わせて「国・独法+国際・外国」とした。また、(6)については、専図協13機関種のうち、(6)、(7)および(10)を合わせて「公立図書館+公文書館+地方議会・地方自治体」とした。具体的な機関種別専門図書館の内訳については、文末の表2「機関種別専門図書館リスト」を参照されたい。専図協の機関種別割合と比べると、本調査の訪問別機関種では、(3) 公益社団・財団、一般社団・財団が最も多く、全体の35%を占めているが、(1)から(3)までの合計で6割以上になるため、専図協の実態と類似しているようにも思われる。

(3) 調査機関の主題分野の概要

調査機関の主題分野については、専門図書館協議会私立図書館小委員会編による『課題解決のための専門図書館ガイドブック』(以下「ガイドブック」^{註11})をメインとし、専図協「総覧2018」の主題も併せて参照した。「ガイドブック」における主題は次の9に分類されている：(1) 暮らし・スポーツ・文学、(2) ビジネス・産業、(3) 科学技術・医療・健康、(4) 歴史・地理・哲学・宗教、(5) 子ども・教育・社会・人権・女性・福祉、(6) 美術、(7) 音楽・演劇・映画・メディア、(8) 行政・防災、(9) 国際・海外・語学。

本調査における訪問機関(合計28機関・110件)

別主題分野は、「ガイドブック」の(2)(3)(8)を除いた以下の6つである：(1) 暮らし・スポーツ・文学(5機関・23件・20.9%)、(2) 歴史・地理・哲学・宗教(2機関・8件・7.3%)、(3) 子ども・教育・社会・人権・女性・福祉・行政(6機関・30件・27.3%)、(4) 美術(4機関・21件・19.1%)、(5) 音楽・演劇・映画・メディア(9機関・25件・22.7%)、(6) 国際・海外・語学(2機関・3件・2.7%)。主題(3)では、「ガイドブック」(8) 行政・防災の「行政」をあわせて、(3) 子ども・教育・社会・人権・女性・福祉・行政とした。個別具体的な主題別専門図書館の内訳については、文末の表3「主題分野別専門図書館リスト」を参照されたい。

専図協「総覧」(n=1645)における主たる主題分野のトップ5は、1位が「医学」(212機関)であり、以下「経済全般・経済学」(206機関)、「政治・社会全般」(200機関)、「自然科学全般」(188機関)、「芸術・美術全般」(176機関)と続き、トップ5の主題で6割(59.7%)をカバーしていることになる。本調査の訪問機関の主題は人文系に大きく偏っているため単純な比較はできないが、社会科学系の(3)の主題と芸術系を主とした(5)の主題を合わせて、5割をカバーした。次節では、調査の結果を分析・考察する。

3. 調査結果と考察

(1) 調査項目の概要

本調査では「望ましい基準」における私立図書館の「一 管理運営 2 広報活動及び情報公開、4 施設・設備」「二 図書館資料」「三 図書館サービス」の4項目をみていく。まず、専門図書館に関する総合評価を概観し、「一 管理運営 4 施設・設備」として、「図書館への交通の便と周辺環境」および「図書館の構造・案内表示(サイン)の配置」について考察する。次に、「二 図書館資料」として、「図書・各種資料・データベース」についてみていく。さらに、「三 図書館サービス」として、「カウンターサービス業務と居心地のよさ」および「レファレンスサービス」について分析をする。最後に、「一 管理運営 2 広報活動及び情報公開」として、「広報活動」について考察する。図書館全般の総合評価と広報活動については、機関種別および主題分野別の特徴も併せて分析する。

(2) 専門図書館に関する総合評価

訪問先の専門図書館に関する総合評価では、有効回収数110件のうち、「大変良い」が24件(21.8%)、「良い」が57件(51.8%)、「ふつう」が21件(19.1%)、「もう少し工夫が必要」が8件(7.3%)、「工夫が必要」が0件(0.0%)であった。アンケート回答者の約74%が専門図書館の総合評価に「大変良い」「良い」と回答し、「もう少し工夫が必要」「工夫が必要」と評価した者は

1割にも満たない。

アンケートの回答結果を機関種別に詳しく見ていくと、約90% (38件中34件)が「公益社団・財団+一般社団・財団」の専門図書館を「大変良い」「良い」と評価をした一方、「美・博・資」では53.3%(15件中8件)、「民間企業」では54.5%(11件中6件)にとどまった。その他「大変良い」「良い」の評価では、「国・独法+国際・外国」で81.8%(11件中9件)、「公立図書館+公文書館+地方議会・地方自治体」で76.5%(17件中13件)、「大学・大学院」で61.1%(18件中11件)であった。肯定的評価の機関種別割合の上位と下位では実に40%近くの開きがあった。

「工夫が必要」との評価はなかったが、「もう少し工夫が必要」の評価では、「大学・大学院」で3件、「民間企業」で2件、「国・独法+国際・外国」、「公益社団・財団+一般社団・財団」、「公立図書館+公文書館+地方議会・地方自治体」でそれぞれ1件の合計8件であった。

次に主題分野別に見ていくと、8割以上が「大変良い」もしくは「良い」と評価をしたのは、「子ども・教育・社会・人権・女性・福祉・行政」の主題の専門図書館で86.7%(30件中26件)と「音楽・演劇・映画・メディア」が80.0%(25件中20件)であり、「くらし・スポーツ・文学」が78.3%(23件中18件)、「国際・海外・語学」が66.7%(3件中2件)、「美術」が52.4%(21件中11件)、「歴史・地理・哲学・宗教」が50%(8件中4件)と続いた。「もう少し工夫が必要」と評価された主題分野別図書館の内訳は、「美術」で5件、「くらし・スポーツ・文学」、「子ども・教育・社会・人権・女性・福祉・行政」および「国際・海外・語学」でそれぞれ1件であった。機関別と同様主題分野別でも、肯定的評価の差が35%以上と大きいことがわかった。

それでは訪問者たちは、専門図書館のどのようなところを評価しているのだろうか。「大変良い」もしくは「よい」と回答した者のコメント例では、訪問先の図書館の物理的空間的制限(例えば、最寄り駅から遠い、館内が狭いなど)など、図書館側の努力だけでは改善できない点も理解した上で、総合的に評価していることが以下の総評からわかる。

今回、初めて〇〇にお邪魔したが、交通の便も悪くなく、建物内の二、三階に博物館が配置されていたが看板もわかりやすく迷うことなく目的地に到着することができた。入り口付近にいた警備の方が親切な方で行きは受付の場所、帰りはエレベーターの位置を教えていただくことができ、とても分かりやすかった。受付の方も最初に館内の場所の説明を行ってくれ、利用者への対応がしっかりしていた。館内の雰囲気もすごしやすく、特に子供たちが飽きないように体験型のものなどいくつかあり、子供たちも楽しそうな雰囲気が見てとれる。課題としては新

聞の閲覧室の場所がわかりにくかったため、工夫をしたほうが良いと感じた。HPでかかざるとおり、子供からシニアまで幅広い人々におすすめする。(公益社団・財団、一般社団・財団・2019年)

〇〇は、最寄り駅である〇〇駅(出口1)から徒歩1分の場所にあるため、アクセスが非常に良かった。専門図書や資料(〇〇雑誌、パンフレット、寄贈書など様々である)が充実しており、〇〇について興味がある人、もしくはそれらを専門としている人が利用するのはもちろんだが、レファレンス質問などに職員の方が丁寧に対応をして下さるので、初めて来た人や〇〇に詳しくない人でも利用しやすい専門図書館なのではないだろうか。また、独自のデータベースである「デジタル資料閲覧システム」には、目次のタイトルを画面上でクリックすることで、自分が見たいページにすぐに移動することができる「目次リンク」という機能があり、非常に印象的なサービスだと感じた。照明もまぶしくなく、机やイス以外にもソファが配置されていたので、利用者は落ち着いた環境で閲覧・研究ができると思う。(国・独法+国際・外国・2021年)

「もう少し工夫が必要」と評価したコメントでは、訪問者の多くがそれぞれの専門図書館の優れた面を認識しつつも、どのような工夫が必要なのか、事例を挙げながら指摘していた。例えば、次のような事例である。

利用者層はシニアが多く落ち着いている。娯楽施設や車の騒音など、都会の喧騒はなくリラックスして通える点が良い。しかしそういった素晴らしい雰囲気、利用者用の机に整理しきれず本がおいてある、などの点が壊し気味であるので、整理整頓を工夫すべき。資料は、歴史のあるものを中心に豊富であるので、週刊誌月刊誌などを読み当時は思い出したいシニア層や〇〇の歴史を学びたい成人層におすすめしたい。(大学・大学院・2017年)

所蔵する歴史的〇〇には手書きのメモや職員間のメール記録なども含まれ、「〇〇の記録を保存する」という使命を具体的に実感することができた。〇〇編さんなどを通じて収集した古文書も、当時の様子を知ることのできる貴重なものだと思った。しかし、「保存」はできていても、「目録情報の蓄積」、そして「利用・活用」にはまだ課題が多く、もったいないと感じた。バスの本数は多く、そこまで不便な立地ではない上、職員の方の対応も丁寧だったので、もう一步利用者層を広げ、利用を増やして活性化できれば、いまは眠っている情報資源を活躍させられる潜在力、ポテンシャルがあると感じた。(公立図書

多くの公開された専門図書館はだれもが利用できる空間でもある。こうした利用者目線の指摘は、専門図書館を管理運営していく上でも参考になるところもあろう。次は、図書館への交通の便と周辺環境についてみていく。

(3) 専門図書館の施設・設備

① 図書館への交通の便と周辺環境

交通の便については、「図書館に行くための交通手段が整っている・最寄り駅から徒歩5分以内の場所にある」が46件(41.8%)、「図書館に行くための交通手段がだいたい整っている・最寄り駅から徒歩5から10分以内の場所にある」が44件(40.0%)、「図書館に行くための交通手段があまり整っていない・最寄り駅から徒歩10分以上かかる、もしくは最寄り駅からバスも利用しなければならない」が24件(21.8%)であった。このことから、8割以上の訪問先の専門図書館は、最寄り駅から徒歩10分以内の場所にあり、利便性が良いことがわかる。

図書館の周辺環境については、「近くには保育所、学校、博物館や公民館などの社会・文化施設がある」と回答したのは61件(55.5%)、「近くに市役所や郵便局等の公共施設がある」では43件(39.1%)、「近くに商業施設がある」は44件(40.0%)、「近くに何の施設も併設されていない(住宅街)」は25件(22.7%)であった。よって、訪問先の専門図書館の多くは、何らかの社会・文化施設や公共施設、商業施設が併設されている場所に立地していることがわかる。

「図書館の位置・交通の便」の総合評価について、「大変良い」は41件(37.3%)、「良い」は28件(25.5%)、「ふつう」は24件(21.8%)、「もう少し工夫が必要」は16件(14.5%)、「工夫が必要」は1件(0.9%)であった。ここでは「大変良い」から「ふつう」までの評価が85%になる。「最寄り駅から徒歩5分以内」及び「5分超から10分以内」の合計が8割強であることから、最寄り駅から徒歩10分以内の立地が交通の便に関する評価の分岐点になるものと考えられる。次に、専門図書館の構造や案内表示の配置についてみていく。

② 専門図書館の構造・案内表示(サイン)の配置

図書館の構造・案内表示については、「入り口付近に受付等の人があり、分からない場所などの対応してくれる」が83件(75.5%)、「入り口付近に総合カウンター等があり、分かりやすい」が65件(59.1%)、「コーナーやコンピュータ、参考図書等は分かりやすい」が50件(53.2%)、「館内全体のサインが入り口付近にあり、把握しやすい」および「新聞コーナーやコンピュータ、参考図書などの場所は分かりやすい」がそれぞれ33

件(30.0%)、「場所の要所(天井・本棚等)に、案内の掲示板があり、分かりやすい」が30件(27.3%)であり、「全体の案内表示が入り口等、すぐ目に付くところがない」は24件(21.8%)であった。

案内表示等については、多くの図書館で何らかの工夫をしていることが分かった。しかし、2割強の訪問者が「全体の案内表示が入り口等、すぐ目に付くところがない」と回答したということは、専門図書館の構造や案内表示について、さらなる改善の余地が残されているものと思われる。

「図書館の構造・案内表示」の総合評価では、「大変良い」が15件(13.6%)、「良い」が50件(45.5%)、「ふつう」が31件(28.2%)、「もう少し工夫が必要」が12件(10.9%)、「工夫が必要」が2件(1.8%)であった。6割弱の評価者が「大変良い」もしくは「良い」と評価し、1割強が「もう少し工夫が必要」もしくは「工夫が必要」と評価した。

総合評価が肯定的な理由として挙げられるのは、どこに何があるのかの案内が利用者によりわかりやすく表示されていることであろう。例えば、「建物外にも案内表示があり、迷うことなく閲覧室に行くことができたため。また、そこに受付の方がいてすぐに案内をしてくれた」(大学・大学院・2019年)というものや「案内表示もあり、図書棚の配置もきれいに規則的に整列しているため非常にわかりやすい」(公益社団・財団+一般社団・財団・2018年)といった理由からも見て取れる。

逆に、工夫が必要な事例では、「図書室の入り口のすぐそばに、サービス関連の人が一人設置されていたが、案内板がすぐに見当たらなかったため、そこが少し改善が必要であると考えたから」(美・博・資・2019年)といった指摘や「小さい図書館なので一度訪れれば案内表示などなくても館内の様子を掴めると思うが、初めて訪れた人からすれば、入り口付近がいきなり無人のホールとなっておりカウンターや館内図が見当たらないのでどこへ向かえばいいのか不安になる印象があったから」(公益社団・財団+一般社団・財団・2020年)といったコメントが挙げられる。それぞれの図書館が案内表示に創意工夫をしているものと考えられるが、初めて訪れる利用者の目線にたった案内表示に改善の余地もあるのではなからうか。次に、図書・各種資料、データベースの配置についてみていく。

(4) 図書・各種資料、データベースの配置

「望ましい基準」「二 図書館資料」の「図書・各種資料、データベースの配置」の項目では、専門図書館の資料種別の配置および状況、分類方法、書架、専用ブースなどをみていく。

① 図書・各種資料

専門図書館では、専門分野の図書や雑誌だけではな

く、映像資料や録音資料、電子資料などのいわゆる各種資料なども豊富に取りそろえている。そこで、専門図書館における収集資料の概要について調査した結果、「専門分野の図書を中心にそろえてある」が82件(74.5%)、「専門分野の図書と各種資料(映像資料・電子資料など)の両方をそろえている」が54件(49.1%)、「専門分野の各種資料(映像資料・電子資料など)を中心にそろえている」が13件(11.8%)であった。専門図書館によっては図書以外の資料を中心に収集しているところもあるが、多くの専門図書館が所蔵する資料では図書が多いことがわかる。

資料の分類については、「分類は日本十進分類法を採用している」図書館が9件(8.2%)であり、「基本は日本十進分類法であるが、資料によっては独自の分類法を採用している」ところが36件(32.7%)であった。通常の公立図書館や学校図書館などに比べると、専門図書館では十進分類法以外の独自の分類法を採用している館が多い傾向があることがわかる。

資料を閲覧する環境整備等では、「書架は、子どもや障がいを持った利用者にも配慮した設計になっている(たなの高さ・書架の配置など)」が31件(28.2%)、「書架ごとにテーマの見出しが大きな文字で書かれており、分かりやすい」が36件(32.7%)、「所々に本を置いたりメモをする場所などがあり、使い勝手がよい」が40件(36.4%)、「本を読む机や椅子などが適度に配置されている」が84件(76.4%)であった。また、「各種資料を閲覧・視聴するための専用のブースがある」が67件(60.9%)、「各種資料を閲覧・視聴するための専用のブースがない」が9件(8.2%)であった。「図書・各種資料はわかりやすく配置されている」は70件(63.6%)、「図書・各種資料の配置はわかりにくい」は15件(13.6%)であった。

多くの図書館では、図書館家具や各種資料の閲覧・視聴するための専用ブースの設置を適切に行い、資料閲覧の環境を整えているようである。しかし、各種資料の専用ブースがないところや図書および各種資料の配置がわかりにくいといった指摘も1割前後あった。ここは、課題のひとつとしてあげられる点であろう。

本現地調査における専門図書館の開架図書・各種資料の総合評価は、「大変良い」が35件(31.8%)、「良い」が44件(40.0%)、「ふつう」が22件(20.0%)、「もう少し改善が必要」が8件(7.3%)、「改善が必要」が1件(0.9%)であった。70%以上の回答者が「大変良い」もしくは「良い」と評価をしたことになる。

肯定的な評価では、「基本的には図書しかないが、利用者を意識して配置が工夫されており、どこに何が配架されているか分かりやすかった。閲覧席も広々としていて、明るくきれいで過ごしやすそうだった」(公立図書館+公文書館+地方議会・地方自治体・2021年)といったように資料配置の工夫や図書館そのものの環

境の良さを指摘するコメントがあった。また、「メインは閉架であり開架に出ているのは一部とのことだったが、紙の資料の書架だけでなく、映像ライブラリーとマイクロリーダーもありかなり充実していると感じた。十進分類法を主に使いつつ、灰色文献などには独自の分類を採用している。また子供向けのものや博物館展示に沿ったものは別でまとめるなど使いやすさへの工夫も感じられる。机や椅子はコロナ対策で数を減らしてはいるものの、かなり使いやすい空間である」(美・博・資・2020年)といった図書館資料や環境の整備に対する具体的なコメントも見られた。

開架図書や各種資料のあり方について、「もう少し改善が必要」と考えられる点では、「やはり保存という要素が強い排列で、少し利用者を引き付ける工夫や趣向はあまり施されていないように思えたから」(民間企業・2017年)といった理由や「棚の見出しがわかりにくい。視聴覚資料の閲覧ブースは仕切りが机までではなく、隣との距離も近いので、落ち着かなさそうだと感じた。閲覧席は分散してもよさそうだと感じた」(国・独法+国際・外国・2019年)といったコメントがあった。個別具体的な指摘ではあるが、よりよい図書館の環境整備の構築に参考になるものと思われる。

② データベース

最後にデータベースについてであるが、専協協「専門情報機関の現状」のホームページによれば、「総覧2018」の全回答機関数1645件中、無回答およびデータベースを契約していないと回答した機関は約半数の819件であり、データベースを契約していると回答した機関は826件であった。うち契約している上位3位までのデータベースは、「CiNii」(66.8%)、「Science Direct」(49.3%)、「日経テレコン21」(45%)であった。

本調査では、「専門図書館ならではの、専門領域のデータベースがある(有料・無料不問)」が35件(31.8%)、「各種資料・新聞・雑誌記事などの有料データベースがある」が17件(15.5%)であり、「個人で使えるデータベースはなく、代替検索サービスのみ」が18件(16.4%)であった。訪問図書館の約5割弱に何らかのデータベースがあることが分かる。次に、データベースの案内等について、「検索のわかりやすい案内やマニュアルがある」が31件(28.2%)であり、「検索の案内やマニュアルは、なかった」が44件(40.0%)であった。検索については、「検索をするのに、すぐ端末をつかえた」が59件(53.6%)であり、「検索をするための待ち時間は5分以内であった」が11件(10.0%)、「検索をするための待ち時間は5分以上10分以内であった」が2件(1.8%)であった。検索結果の印刷については、「データベースでの検索内容を印刷できる(有料・無料不問)」が18件(16.4%)であり、「データベースでの検索内容は印刷できない」が34件(30.9%)であ

った。半数以上のデータベースの端末はすぐ使えるようではあるが、検索の案内やマニュアルがなかったという回答が40%、検索結果の印刷ができないという回答が31%あった。これらの指摘は比較的容易に改善ができることから、図書館によっては案内・マニュアル等の整備や印刷機の設置を検討することを考えてもよいのではなかろうか。

(5) 図書館サービス

「図書館サービス」の項目では、カウンター業務と居心地のよさ、およびレファレンスサービスの対応について分析していく。サービスカウンターは図書館の顔ともいえる重要な場所であり、利用者が資料探索や貸し出し等で最もお世話になる場所でもある。また、レファレンスサービスにおける情報の収集、加工、提供は図書館サービスの要ともいえる。ここでは、カウンター業務や貸出業務、接遇、レファレンスサービスについて見ていく。

① カウンター業務・居心地のよさ

カウンター業務に関する調査結果は、「カウンターは、入ってすぐのわかりやすいところにある」が83件(75.5%)、「貸出業務などは迅速に対応(待たせない)している」が40件(36.4%)、「利用貸し出しは行っているが、返却業務のサービスは時間内のみ」が27件(24.5%)、「利用貸し出しを行っており、返却業務のサービスも時間外の対策(ブック・ポストなど)も講じている」が16件(14.5%)、「服装や言葉づかいなど、特に問題はない」が96件(87.3%)であった。多くの図書館ではカウンターの設置や接遇などが適切に行われていることが分かる。

専門協「専門情報機関の現状」の専門図書館「座席数の分布」によると、「座席数10席以下」(430機関・約25%)が最も多く、「11席-20席」および「21席-40席」と続き、全体の60%弱が40席以下ということである。本調査では、「閲覧等に十分な机や机が配置されている」の項目が94件(85.5%)であった。専門図書館では小規模な機関が多いため、多くの座席数がなかったとしても「閲覧等には十分」である現状があるのかもしれない。

そのほか、図書館の居心地のよさについての調査では、「落ち着いた調度品や絵画、芸術品(市民の作品を含む)などが配置・展示されている」が36件(32.7%)、「ソファや畳など憩いを得ることができる環境がある」が35件(31.8%)、「図書館には適度な緑や植物が配置されている」が24件(21.8%)、「グループ読書室・会議室(数名で利用)がある」が22件(20.0%)、「キャレル(仕切りのついた読書コーナー)がある」が19件(17.3%)、「近くに飲食できるスペースがある」が17件(15.5%)であり、「特に憩いを得るような工

夫は見あたらない」は24件(21.8%)であった。多様な利用者を想定した公立図書館とは違い、専門図書館の利用者は何かしらの目的を持ってくる者が多いと思われる。そのため、専門図書館では、「基本的に目録の引き出し、レファレンスカウンター、長机のみのシンプルな構成であり、憩いやくつろぎには重点を置かず、調べ物や興味の閲覧に重きを置いている」(公益社団・財団+一般社団・財団・2019年)機関が多いものと考えられる。

専門図書館のカウンター業務に関する総合評価では、「大変良い」が25件(22.7%)、「良い」が44件(40.0%)、「ふつう」が35件(31.8%)、「もう少し改善が必要」が5件(4.5%)、「改善が必要」が1件(0.9%)であった。約6割強が「大変良い」もしくは「良い」と評価する一方、「もう少し改善が必要」もしくは「改善が必要」と評価するのは1割に満たない。総じて、カウンター業務についての評価は良好であり、改善を示唆する案件は少ないようであった。

肯定的なコメントとしては、親切丁寧、迅速といったキーワードが目立つ。例えば、「借りている人や質問している人を見かけたが丁寧な対応であった。また、私がレファレンスサービスをした際も、「複写サービスを利用する場合は17時30分までです」など、声かけをしてくれたので、焦らずに利用することができた」(国・独法+国際・外国・2017年)といったものや「カウンターにいた司書さんがとても親切でいろいろ教えてくれた。資料の準備ができたなら順番に呼び出されるがとても迅速だった」(公益社団・財団+一般社団・財団・2019年)という記載があった。

件数としては少なかったが、工夫が必要な事例としては、「そもそも資料の貸し出しを行っていないため、利用者に対して閉じた印象である」(美・博・資・2017年)といったものがあつた。専門図書館という性質上、貸し出しを行っていない図書館もあるが、利用者の理解を得るのは難しいという現状があることが分かる。利用者の理解を得るための説明を忍耐強く続けていくことが必要と思われる。その他には「読みたい本を職員の方に伝え持ってきていただく仕組み。あまり利用されないような専門的な(マイナーな)資料を頼んだところ、10分以上待ったので少し不便に感じたから」(大学・大学院・2017年)といったコメントがあつた。カウンター業務には親切丁寧だけでなく、ある程度の迅速さも求められていることがわかる。

② レファレンスサービス

レファレンスサービスは、館種を問わず図書館の要となるサービスの一つである。本調査のレファレンスサービスの項目では、レファレンスサービスのカウンター、レファレンスサービス職員の有無、レファレンスサービスの対応等を見ていく。まず、レファレンス

サービスカウンターの調査では、「レファレンスサービス専用のカウンターがある」が28件(25.5%)、「レファレンスサービス専用のカウンターがわかりやすいところにある」が22件(20.0%)、「レファレンスサービス専用のカウンターはあるが、どこにあるのかわかりにくい」が5件(4.5%)であった。約4分の1程度の図書館ではレファレンスサービスのカウンターがあり、その多くがわかりやすいところにある。

次に、「レファレンスサービスには図書館職員が常駐している」が22件(20.0%)であり、「レファレンスサービスでの対応は適切だ(とくに問題はない)」が78件(70.9%)であった。つまり、7割強の回答者がレファレンスサービスの対応は適切であると判断していることになる。

本調査では、報告者にレファレンスサービスの利用を課した。その総合評価は、「大変良い」が25件(22.7%)、「良い」が36件(32.7%)、「ふつう」が32件(29.1%)、「もう少し改善が必要」が10件(9.1%)、「改善が必要」が7件(6.4%)であった。レファレンスサービスの総合評価を肯定的にした者が半数以上(55.4%)いる一方、「もう少し改善が必要」もしくは「改善が必要」と評価した者も併せて15.5%であった。それでは、よいレファレンスサービスとはいかなるものか例を挙げてみよう。

夏目漱石と近代哲学の関係について調べる時、どうデータベースを利用すれば良いか。まず、どのような検索を試みたか聞かれた。「漱石 哲学」だけだと答えると、漱石の思想を代表する「則天去私」で検索してみるとか、書籍だけでなく論文検索を試みることや国際研究のアーカイブの利用方法を教えてくれた。特にアーカイブの使い方を、この件だけでなく今後もいかなるよう丁寧に教えてくれた。(美・博・資・2018年)

「男性の育休について調べている。パパ休暇やパパママ育休プラスに関連する資料があれば見たい」と質問した。質問内容は最近のことなので資料はないようだが、関連資料を教えてくれた。育休の国内の現状や国際比較をしたいと伝えると、白書や東京都が出している統計、国際比較データブックを数冊出してくれた。付箋もつけてくれたので、目的のページをすぐ見つけられた。専門図書館のレファレンス専任職員ということもあり、知識も豊富で、対応も大変丁寧な印象を受けた。しばらくカウンターにもいてくれて、気にかけてくれた。(公立図書館+公文書館+地方議会・地方自治体・2018年)

いずれのレファレンスサービスも「親身」で「丁寧」な対応に加えて、司書の専門性を生かしたアドバイスや

利用者教育などが、報告者の心に響いているようである。

その一方で、「もう少し改善が必要」もしくは「改善が必要」な事例には次の指摘がある。例えば、「江戸時代初期の日本とオランダの交易について知りたい」という問いに「OPACで検索していただけますか?キーワード検索を活用してみてください(美・博・資・2019年)」といったように、利用者の「自主性」を尊重するような対応である。この「自主性」の尊重も過ぎると、利用者のニーズに十分に答えていないと感じる利用者もいるかもしれないので、注意が必要である。質問の内容によっては、キーワード検索のヒントなどを伝える対応も有効であろう。また、「レファレンスカウンターが見つからなかった。貸出等をしているカウンターの方がレファレンスサービスをしてもらえるのかもしれないが、忙しそうで聞けなかった」(公益社団・財団+一般社団・財団・2017年)というコメントもあった。「忙しそうで、声をかけづらい」という状況は館種を問わず、よく報告されることである。気軽にレファレンスサービスが受けられることを利用者に周知すると同時に職員による雰囲気づくりも必要になってくるものと思われる。

レファレンスサービスは、図書館司書の専門性が存分に発揮されるサービスの一つである。こうした点を意識したレファレンスインタビューを磨くための研修やレファレンスツールの構築などが必要になってくると思われる。次に、図書館の広報活動についてみていく。

(6) 広報活動

広報活動については、「広報誌はある」が86件(78.2%)であり、「広報誌はない」が15件(13.6%)であることから、ほとんどの専門図書館では何らかの広報活動をしているものと思われる。広報誌の内訳を詳しくみると、「広報誌は、カラフルで分かりやすい」が56件(50.9%)、「広報誌は、紙と電子媒体(ホームページ)の両方ある」が52件(47.3%)、「広報誌には、さまざまなイベントが載っており魅力的だ」が44件(40.0%)、「広報誌は、見出しやイラストなど内容の構成に工夫が見られる」が41件(37.3%)、「広報誌は、子どもからお年寄りまで多様な年代の利用者を想定した内容だ」が29件(26.4%)であったが、「広報誌は、内容がありきたりですこし工夫が必要だ」という評価は8件(7.3%)あった。広報誌についてはおおむね肯定的な評価が多いようである。

次に「広報」そのものの総合評価について見ていくと、「大変良い」は20件(18.2%)、「良い」は39件(35.5%)、「ふつう」は32件(29.1%)、「もう少し改善が必要」は13件(11.8%)、「改善が必要」は6件(5.5%)であった。広報の総合評価を肯定的にとらえているのは半数強であり、「もう少し改善が必要」および「改善が必要」と評価した者が2割弱いることが分かった。

広報については、機関種別、主題分野別でも考察してみよう。

まず、広報の調査結果を機関種別に詳しく見ていくと、「大変良い」「良い」と評価をしたのは、「国・独法+国際・外国」で81.8%（11件中9件）、「公益社団・財団+一般社団・財団」で71.1%（38件中27件）、「民間企業」では54.5%（11件中6件）、「大学・大学院」では38.9%（18件中7件）、「公立図書館+公文書館+地方議会+地方自治体」で35.3%（17件中6件）、「美・博・資」では26.7%（15件中4件）であった。サンプル数が少ないとはいえ、機関種によって広報に関する肯定的な評価の上位と下位では50%以上の大きな開きがあることがわかった。

「もう少し工夫が必要」および「工夫が必要」の評価では、「大学・大学院」で6件、「公益社団・財団+一般社団・財団」で5件、「美・博・資」および「公立図書館+公文書館+地方議会+地方自治体」でそれぞれ3件、「民間企業」および「国・独法+国際・外国」でそれぞれ1件の合計19件であった。

次に主題別に広報の評価を見ていくと、6割以上が「大変良い」または「良い」と評価をしたのは、「子ども・教育・社会・人権・女性・福祉・行政」の主題で66.7%（30件中20件）、「国際・海外・語学」が66.7%（3件中2件）、「音楽・演劇・映画・メディア」が60.0%（25件中15件）の3つの主題であり、「くらし・スポーツ・文学」が56.5%（23件中13件）、「美術」が33.3%（21件中7件）、「歴史・地理・哲学・宗教」が25%（8件中2件）と続いた。広報については、主題による機関別評価でも大きな開きがあることがわかる。

「もう少し工夫が必要」および「工夫が必要」といった評価では、「美術」で7件、「くらし・スポーツ・文学」で5件、「子ども・教育・社会・人権・女性・福祉・行政」で3件、「音楽・演劇・映画・メディア」で2件、そして「国際・海外・語学」および「歴史・地理・哲学・宗教」の主題でそれぞれ1件であった。

広報全体に関する回答者の評価は、機関種別、主題分野別のどちらでも、大きな開きがあった。全体的な広報の評価では、肯定的（「大変良い」「良い」）な評価は5割強であったが、「もう少し工夫が必要」または「工夫が必要」の評価も2割弱あった。つまり、館種や主題別によっては、8割以上の肯定的評価を受けたところもあれば、3割に満たない機関や主題のグループもあった。機関によっては広報のあり方自体を見直す契機になればとも考える。ただし、広報誌については、その存在を認識している者が8割弱あり、3割から5割の訪問者が、広報誌について何らかの肯定的な評価をしているところは救いではある。それでは広報や広報誌についてのどのような指摘をしているのだろうか。その肯定的なコメントを見ていこう。

この図書館はウェブ上にホームページを作成しているだけでなく、InstagramやFacebook、YouTubeなども運営しており広報が行き届いている。「図書館だより」も発行して近所の小学校に配布したり、機関誌を発行したりして図書館の活動を多く発信していると感じたため。（公益社団・財団+一般社団・財団・2020年）

カラフルで分かりやすい仕様です。専門用語や難しい単語はなく、あったとしても広報誌内に説明が書かれています。資料館付近に掲示板があり、そこにポスター等がまとめて貼り付けられていました。冊子状のものでは、イベントなら図や写真、そのイベントと関わりのある文献の引用を用いていて、具体的にどのようなことをしてどのような知識・情報が得られるのかを明確に記しています。初心者、専門家はもちろん、〇〇に関心の薄い人でも興味を持てるような工夫をしていると思いました。（美・博・資・2017年）

肯定的な広報紙の事例では、見やすい、分かりやすい、カラフルなものが好まれるようである。広報紙そのものもわかりやすいところに提示してあるというコメントも多かった。また、本調査の回答者は20歳前後の若者であることから、若い世代をターゲットにしたSNSによる広報は、重要な戦略として認識されていることもわかる。

その一方で、「工夫が必要」な広報評価の理由の多くは、「そもそも広告誌がない」または「見つけにくい」（広報誌の）「魅力が少ない」ということである。例えば、「〇〇ライブラリーとしての広報誌は無く、〇〇博物館としての広報誌に少々情報が載っている程度である。基本的にイベントなどは開催していないため広報については冊子ではなくHP上でその月の博物館の展示にちなんだ資料を紹介する程度に留まっている」（公益社団・財団+一般社団・財団・2019年）といったものや「少々地味な気がする。展示などの宣伝などが多かったが、対象とする年齢がかなり上の世代なのか、若者はあまり行ってみようと思えるようなものではないのではないか」（美・博・資・2017年）といった指摘があった。また、SNSなどネット空間での広報でも、広報誌と同様、見やすくわかりやすい、カラフルなものが支持されているようである。例えば、次の指摘である。「広報誌はウェブ媒体のみで、広報誌というよりはブログのような感じだった。色味が乏しく、内容もイベントの開催概要のみといった素っ気ない感じだったので、この評価とした。しかし、ツイッターアカウントがあり、イベントの告知や混雑状況をツイートしていた点は評価できる」（大学・大学院・2018年）といったものである。こうした若者の意見は、今後の専門図書館の広報のあり

方を考える上で、参考になるのではないかとと思われる。

4. おわりに

本稿では、専門図書館に関する総合評価を概観した後、「図書館への交通の便と周辺環境」・「図書館の構造・案内表示の配置」、「図書・各種資料・データベース」、「カウンターサービス業務と居心地のよさ」・「レファレンスサービス」、「広報活動」の4点について分析し、考察を行った。

専門図書館における現地調査の評価は、概ね良好であった。特に評価の高かった項目は、「図書館への交通の便と周辺環境」、「図書・各種資料」および「カウンター業務と居心地のよさ」であり、いずれも7割以上の訪問者が肯定的な評価をした。図書館の総合評価においては、全体で7割以上が肯定的な評価であったが、さらに機関種別・主題分野別に分析をしていくと、上

位と下位の格差が大きいこともわかった。

改善を要する項目については、「図書館の構造・案内表示の配置」、「広報活動」および「レファレンスサービス」の3点があげられる。まず、案内表示等について、2割強の者が「全体の案内表示が入口等、すぐ目に付くところがない」と回答したということは、課題のひとつともいえよう。一般的に、専門図書館の多くは他機関種に比べると小規模な図書館が多いと考えられるため、経済的・物理的負荷が少ないサイン等の改善は取りかかりやすいのではなかろうか。次に、広報であるが、広報全体でも、機関種別・主題分野別でも、肯定的な評価の上位と下位との落差が大きい結果となった。また、「工夫が必要」「もう少し工夫が必要」の評価も2割弱あった。図書館によっては、若い世代や潜在的利用者を取り込むためにも今少しSNSをはじめとした広報に力を入れる必要性があるのではなかろうか。最後はレファレンスサービスである。レファレン

表2 機関種別専門図書館リスト

機関種	専門図書館リスト
大学・大学院	明治大学米沢嘉博記念図書館、明治大学現代マンガ図書館、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館
美術館・博物館・資(史)料館	国文学研究資料館図書館、東京都江戸東京博物館図書室、昭和館図書室
公益社団・財団+一般社団・財団	公益財団法人味の素の文化センター、公益財団法人東京子ども図書館、公益財団法人松竹大谷図書館、公益財団法人日本近代文学館、公益財団法人日本交通公社旅の図書館、一般財団法人民主音楽協会民音音楽博物館音楽ライブラリー、三鷹の森ジブリ美術館、日本カメラ博物館JCIIライブラリー、日本新聞博物館
国・独立行政法人+国際機関・外国政府機関	独立行政法人国際交流基金ライブラリー、国立映画アーカイブ(近代美術館フィルムセンター)図書室、国立教育政策研究所図書館、セルバンテス文化センター
民間企業	フジフィルム スクエア、株式会社図書館流通センター(TRC)、ポーラ化粧品文化情報センター、東映アニメーションミュージアム、NHK放送博物館
公立図書館+公文書館+地方議会・地方自治体	いたばしポローニヤ子ども絵本館、川崎公文書館、東京ウィメンズプラザ、東京文化会館音楽資料室

表3 主題分野別専門図書館リスト

主題分野別	専門図書館リスト
くらし・スポーツ・文学	国文学研究資料館図書館、公益財団法人味の素の文化センター、公益財団法人日本近代文学館、ポーラ化粧品文化情報センター、公益財団法人日本交通公社旅の図書館
歴史・地理・哲学・宗教	東京都江戸東京博物館図書室、昭和館図書室
子ども・教育・社会・人権・女性・福祉・行政	公益財団法人東京子ども図書館、国立教育政策研究所図書館、いたばしポローニヤ子ども絵本館、東京ウィメンズプラザ、川崎公文書館、株式会社図書館流通センター(TRC)
美術	明治大学米沢嘉博記念図書館、明治大学現代マンガ図書館、日本カメラ博物館JCIIライブラリー、フジフィルム スクエア
音楽・演劇・映画・メディア	早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、公益財団法人松竹大谷図書館、一般財団法人民主音楽協会民音音楽博物館音楽ライブラリー、三鷹の森ジブリ美術館、国立映画アーカイブ(近代美術館フィルムセンター)図書室、東映アニメーションミュージアム、NHK放送博物館、日本新聞博物館、東京文化会館音楽資料室
国際・海外・語学	独立行政法人国際交流基金ライブラリー、セルバンテス文化センター

スサービスでは肯定的評価が 55.4%である一方、「(もう少し)改善が必要」との評価も 15.5%であることから、今後より力を入れて取り組むべき課題のひとつと思われる。

専門図書館、とりわけ私立図書館に属する図書館の存在意義は、公立図書館や学校図書館のように法的根拠によるものではなく、レファレンスサービスをはじめとしたサービスそのものの有効性にある^{註12}。しかし、だれもがインターネットに接続して必要な情報が得られる時代にあつて、図書館におけるレファレンスサービスの強みは相対的に薄れてきている。こうした中で、調査・研究活動ならびに企画・開発活動のプロセスを通じ、設置母体や親機関をはじめとした多様な専門図書館の利用者にどれだけ付加価値のある情報を提供し、また提案ができるのかが今後の専門図書館のあり方を考える上での鍵になってくるものと思われる。

註1 文部科学省生涯学習政策局社会教育課『図書館の設置及び運営上の望ましい基準(平成24年文部科学省告示第172号)について』平成24年12月参照。新基準では、その対象に私立図書館が追加され、図書館の運営状況に関する評価の実施並びにその結果の地域住民等への情報提供に努めること等が新たに盛り込まれた。旧基準から新基準まで、図書館法改正(2008)をはじめ、さまざまな法律や報告が提示され、新基準に反映された。

註2 日本図書館協会用語委員会編集(2003)『図書館用語集』三訂版、日本図書館協会、172-173頁。

註3 UNESCO(1976) "Terminology of Documentation" Unesco Press, 1976, p.179.

註4 例えば、青柳英治・長谷川昭子編著(2017)『専門図書館の役割としごと』勁草書房、前園主計(1976)「専門図書館の定義」、Library and information science (14), p325-337を参照。本稿では、専門図書館の定義には深くは踏み込まない。

註5 青柳英治・長谷川昭子編著(2017)『専門図書館の役割としごと』勁草書房、4頁。

註6 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編(2020)『図書館情報学用語辞典』第5版、丸善出版、121頁。

註7 専門図書館協議会、「専門図書館協議会とは」参照：https://jsla.or.jp/about_jsla/ (2022年2月2日最終閲覧)

註8 文部科学省生涯学習政策局社会教育課(2012.12)『図書館の設置及び運営上の望ましい基準(平成24年文部科学省告示第172号)について』55頁：http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/001/1330295.htm (2022年2月2日最終閲覧)

註9 葉袋秀樹(2013)「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」と私立図書館、三田図書館・情報学会研究大会発表論文集、21-24頁。

註10 NetCommonsは大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構の登録商標である。H大学図書館司書資格課程のグループウェアについては、<http://lc.i.hosei.ac.jp/>を参照。

註11 専門図書館協議会私立図書館小委員会編(2021)『課題解決のための専門図書館ガイドブック』、読書工房。

註12 前掲5、4頁参照。